

「主はこう仰せられる。」

この呼びかけは聖書の多くの箇所ですされる。特に預言の書に多く用いられる表現である。民が窮地にあるとき、絶望の淵におちているとき、祖国を失い捕囚の身とされるとき、とにかくお手上げ状態で聞こえてくる「主はこう仰せられる。」そもそも、成す術が閉ざされた状況が襲ったのは、民の身勝手さであり、罪の深さのゆえであった。それでも語りかける「主はこう仰せられる。」

早々と開けた梅雨、灼熱の太陽の下であちこちから聞こえる呼びかけがある。俄かに始まった選挙戦である。決まりきった文言を繰り返し、候補者の名を連呼しながら通りを抜けてゆく。たまに車窓から白い手を振る。声を張り上げ、手を振るが本当に語りかけているのかは不明だ。路上で聞く、通り過ぎるひとり一人に語る言葉よりは、空気のように流れているように聞こえるのは私だけかもしれない。

「主はこう仰せられる」ときは、聞いている民に、主の仰せられるとおりのことが起こる。仰せのごとく時代がつくられてゆく。民が、主の仰せのとおりに応答しなくても、みことばに忠実であっても、「主はこう仰せられる」事は成る。仰せを聞く者は主を知り、聞かない者は主に敵対する道に立つ。

2022年7月2日